「志垣民郎旧蔵　内調資料」解題

岸　俊光（一般社団法人アジア調査会常務理事・事務局長）

１.「内調資料」とは何か

志垣民郎（1922～2020）は、戦後日本の代表的な情報機関である内閣調査室（内調）を長年背負った幹部職員である。内閣調査室の前身である内閣総理大臣官房調査室は、日本が独立する直前の 1952（昭和 27）年 4 月 9 日に新設され、志垣は最も若い職員としてこの組織に加わった。本人の証言によると、室長以外の創設メンバーは志垣を含む 4 人だったという。以来、1978（昭和 53）年 3 月に退官するまで、志垣は第 5 部、第 3 部、第 1 部の主幹（国内、国際等各部門の長の呼称）を歴任した。内調の組織は 6 部制をベースに変動するが、志垣が担当したのはおおむね、学識経験者委託調査、マスコミ調査であった。さらに退官後、内調の委託団体である社団法人国民出版協会の会長を 1990（平成 2）年 5 月まで務めた。

本資料は、志垣が 2020（令和 2）年 5 月に 97 歳で亡くなるまで手元に保管していた内調の資料 377 点と、志垣が小学校 5 年生の頃から書き続けていた日記のうち、内閣総理大臣官房調査室勤務を命じられた 1952 年から国民出版協会会長を退任した 1990 年までの分を整理しデジタル化して公開するものである。

首相直属の情報機関である内調はこれまで正史を編んだことがなく、公文書もわずかしか公開してこなかった。幹部の志垣も黒衣的な存在だったが、晩年の 2019（令和元）年に公刊した回想録『内閣調査室秘録――戦後思想を動かした男』（文春新書）により一躍脚光を浴びることになった。筆者は内調が取り組んだ日本の核政策を研究するため 2014（平成 26）年から志垣の自宅を訪ねるようになり、その縁で『内閣調査室秘録』の編者を務めた。志垣の長男信人氏の協力を得て公刊する本資料「志垣民郎旧蔵　内調資料」は、回想録の裏付けともなる、戦後情報機関の初めてのまとまった記録と位置づけることができる。

２．志垣民郎の足跡と冷戦期の内調

情報機関に対する国民の理解は近年徐々に進みつつあるが、内閣調査室は戦前の情報局などへの反発もあり、厳しい目を向けられてきた。内調にとっても、民主化した戦後日本で「何をなすべきか」は大きな課題であり、「志垣民郎旧蔵　内調資料」にも試行錯誤ぶりを伝える文書が含まれている。長年模索を続ける中から志垣は、委託業務を通じた現実主義の知識人支援という独自の分野を開拓したと思われる。「志垣民郎資料」の具体的内容を紹介する前に、冷戦期の内調の実態を、志垣の足跡や担当した主な業務を通して見ておきたい。

志垣が内閣総理大臣官房調査室に勤務することになった 1952 年頃、新情報機関をめぐり

複数の案がせめぎ合っていた。国家地方警察本部警備部警備課長の村井順は、時の首相吉田茂に「内外のあらゆる情報を集め、これを分析して正しい判断を下す。そしてそれを政府の施策に資する」よう進言した。村井が理想としたのは、ＣＩＡ日本版と言うべきものだった。第四次吉田内閣の国務大臣兼官房長官（組閣後、副総理）に起用された緒方竹虎は、世界の情報をキャッチし分析する「戦前の同盟通信と情報局の機能を併せもつような」国策機関を構想した。吉田自身の考えは今一つはっきりしないが、対共弘報活動及び中国情報収集に関心を持っていた。

情報委員会、内閣情報部、情報局と変遷した戦前の内閣情報機構は、陸軍、海軍、外務省などの権限争いに悩まされたが、戦後の新情報機関も、警察庁、外務省などの主導権争いの舞台となった。内閣総理大臣官房調査室の初代室長となった村井は、そうしたスキャンダルに巻き込まれ、志半ばに更迭された。またこの間の新聞論調は、戦前のような言論統制への懸念からおしなべて厳しいものがあった。

新情報機関の中心になると見られた緒方構想は世論の反発もあって後退し、小型の治安機関として出発した内閣総理大臣官房調査室が定着することになった。内閣総理大臣官房調査室が総理府内部部局組織規定の改正により新設された日の官報には、事務として「政府の重要施策に関する情報をしう(ママ)集、調査し、これに対する各行政機関の連絡及び事務の綜合、調整に関する事務をつかさどる」とだけ記されている。行政史上初めて作られた戦前の情報委員会のような官制は採られなかった。「弘報活動とは何か」、「内閣の重要政策とは何か」と自問自答を繰り返すその後の内調に、創設時の曖昧さが影を落としていたのは疑いない。

志垣は、そんな混乱の中にあった内閣総理大臣官房調査室に旧制東京高等学校の先輩の村井に声をかけられ加わった。29 歳と最も若い創設メンバーだった。志垣らの母校、東京高校は、リベラルな校風で知られる名門だった。生涯の友となる『戦艦大和ノ最期』の作者、吉田満をはじめ、官界、学界、言論界に有為な人材を輩出しており、志垣は内調に入ってからも彼らの多くと交流する。1942（昭和 17）年 4 月、東京帝国大学法学部に入学した志垣は、ここでも後年親しくつきあう政治学者の藤原弘達と同級生になった。そして日本の敗色濃厚な翌 1943（昭和 18）年 10 月 21 日、学徒出陣の壮行会に参加した。青春期に遭遇したこの戦争体験も、戦後の志垣の思想と行動に大きな影響を及ぼすのである。

「志垣民郎旧蔵　内調資料」の大きな特徴は、内調の内部資料に加え、志垣が日々の仕事ぶりをつづった日記（以下、「志垣日記」）が残されていることである。個人が残した外交・情報機関の記録としては、戦前、外務次官や情報局総裁を務めた天羽英二の『天羽英二日記・資料集』（天羽英二日記・資料集刊行会、1982-1992）が知られる。激動期の迫力には及ばなくても、表現の豊かさや精密さでは「志垣日記」の方が上だろう。

内調勤務を命じる人事が発令された直後の「志垣日記」には、「首相官邸に至り村井さんに挨拶。文化面を担当してもらうとの話あり」との記述が残る（資料番号 0312、1952 年 5 月 7 日）。文化面という村井の指示が、その後 26 年にわたる志垣の内調での仕事を特徴づ

けることになった。警察出身者が多くを占める中、世論を相手とする広報活動、オピニオンリーダー（インフルエンサー）たる知識人への対策、メディアウオッチが主たる業務になったのである。

こうした業務の嚆矢となったのが、出版社の全貌社とタイアップした時事月刊誌『全貌』の連載「学者先生の戦前戦後言質集」だった。内調に近いソ連専門の外務官僚のアイデアに想を得て、世間がもてはやす進歩的文化人の変節ぶりを指弾しようと志垣が匿名で執筆したもので、後に単行本になるほど評判を呼んだ。1953（昭和 28）年の「志垣日記」には、『全貌』の原稿執筆に連日精魂を傾ける様子がリアルに描かれている（資料番号 0313）。退官後に出した私家版の本の中で、志垣は「私の役人としての主たるテーマは、日本を共産革命の脅威から守るということであった」と振り返った。連載は「共産主義批判の大柱」になった。

知識人の戦前と戦後の言説を図書館の資料で調べ比較するこの連載の手法は、確かに違法なものではない。敗戦により一夜にして民主主義に転換した戦後日本に対する、同世代の友を戦争で失った志垣からの異議申し立てとも受け取れる。半面、内外文化研究所編としてまとめられた一書は、内閣調査室が多用する、内調の名を秘した「裏広報」でもあった。

左翼学者攻撃と並行して志垣が取り組んだのは、東京大学法学部を中心とする学生有志の研究団体、土曜会との関係づくりだった。機関誌『時代』の発行に対する金銭支援や内面指導の様子が、1952 年頃の「志垣日記」には頻出する。筆者のインタビューに、志垣は「当時、東大は左翼勢力が強く、出版物等でも負けそうだった。そこに『時代』の一誌でも出れば、一応の対抗策といえた」、「反共の組織として（マルクス主義のイデオロギーに反対する）土曜会に援助するのは当然だった」と語った。土曜会会員には、後に沖縄返還交渉で佐藤栄作首相の密使役を務める国際政治学者、若泉敬や、現実主義の学者を多数世に出した『中央公論』編集長の粕谷一希ら、学界や言論界、政界、官界の有力者が多く含まれていた。1960 年代に内調が様々な委託研究を進める際、彼らは協力者の一群になるのである。

内調が、将来左翼の理論家になることを恐れ、保守陣営につなぎとめようとした政治学者の藤原弘達とのつきあいも特筆すべきものである。藤原と東大の同級生だった志垣は、丸山真男に師事していた藤原に接待攻勢をかけ、2 人のつきあいは 25 年に及んだ。志垣が『藤原弘達の生きざまと思索』と題する著作集に寄せた証言「藤原弘達と内閣調査室」には、「首相の施政方針演説で云うべき問題点」、「中立主義に対する意見」、「自民党の近代化について」など、1961 年だけで 9 件について藤原の意見を聞いたことが書かれている（資料番号 0290）。

組織のあり方を模索していた内閣調査室にとって、転機となったのが 1960 年の安保闘争であった。世論を相手にする内調にとって、国会を取り囲むデモのうねりは一大関心事であり、体制側の危機感はいやがうえにも高まった。

1993 年から 97 年まで内閣情報調査室長を務めた大森義夫は著書『日本のインテリジェンス機関』（文春新書、2005）の中で当時の模様を次のように書いている。「六〇年安保の体験から政府は現実的な安全保障論議の育成に努めた。窓口となったのが内調である。内調は

多くの学者・知識人の結集をはかり論議を普及させた。内調が論者たちを結集できたのには縁の下の力持ち、Ｓさんという白髪の担当者がいた」。生前、志垣は筆者の問い合わせに「これは自分ではない、白髪ではなかった」と一笑に付した。この描写の正確さはどうであれ、志垣の知識人人脈は 60 年代に大きく開花したのである。

３．「内調資料」の概要と意味

知識人への委託研究が本格化するまでのこうした内閣調査室の歩みを踏まえ、本資料の中身を紹介し、その意味を考察してみたい。資料の中には、志垣の手元に集まった委託研究の報告書が多数含まれているのが特徴である。資料名に基づいて分類すると、内容は、核政策、ＣＩＡ、アメリカ、中国、ソ連、韓国・朝鮮、国際情勢、日本共産党、安保、学生運動、ＰＳＲ（Political Science Research：政策科学研究会）、教育問題、社会・政治意識、マスメディア、社会風潮調査、選挙、学術会議、ユダヤ人問題など、極めて多岐にわたっている。それに、「志垣日記」、志垣らが参加したＣＩＡ研修の記録、志垣の未発表原稿などが加わる。この中から 3 分野の委託研究報告書に注目してみよう。

第一は、核政策の報告書である。志垣にとって思い出深いものらしく、筆者も本人からたびたび話を聞く機会があった。これまでに確認できた報告書は 18 種類にのぼり、志垣は 16 種類を保管していた。そのうち、1964 年 10 月 16 日の中国初の核実験直後に作成された「中共の核実験と日本の安全保障――わが国のとるべき基本政策の方向について」（資料番号 0373）は無署名だが、実際は学生団体「土曜会」以来、内調と親交があった国際政治学者の若泉敬が執筆したものである。また、1968 年 9 月にまとめられた「日本の核政策に関する基礎的研究（その一）――独立核戦力創設の技術的・組織的・財政的可能性」（資料番号 0379）と、1970 年 1 月の「日本の核政策に関する基礎的研究（その二）――独立核戦力の戦略的・外交的・政治的諸問題」（資料番号 0379_2）は、内調が検討してきた核政策の集大成と位置づけられる。手掛けたのは、永井陽之助、垣花秀武、前田寿、蝋山道雄で、研究会は 4 人の頭文字をとって「カナマロ会」と呼ばれた。

本資料には、（その二）を執筆した蝋山の次女はるみさんの理解を得て、関連資料も収容している。一連の研究は、佐藤政権の非核政策や核拡散防止条約（ＮＰＴ）調印などに影響を与えたと考えられる。

第二は、マスメディア研究の報告書である。戦前の内閣情報機構とマスメディアの関係は非常に複雑だった。特に新聞は、情報局時代に首相の怒りを買って潰されそうになったこともあれば、情報局の幹部になって言論弾圧のイメージ払拭を狙う政府の側に立ったこともあった。翻って戦後の情報機関がマスメディアをどう見ていたかは解明されておらず、マスメディア関係の資料は貴重である。例えば「『朝日』紙面の論理構造分析――朝日は日本を何処へひきづっていくのか」(資料番号 0116)は、朝日新聞一紙に狙いを定めた点でも注目される。「同紙の偏向が著しく濃厚である」という執筆者の警戒感には驚かざるを得ない。

「志垣日記」には、「学界へ露骨な働きかけ」と朝日新聞に報道され、「大分仕事がやりにくくなった」とこぼしたり、朝日新聞が安全保障問題調査会を作った際には同社を表敬し、顔つなぎを試みたりしたことがリアルに記されている。戦後の情報機関とマスメディアの関係は今後の研究課題だろう。

第三は、佐藤栄作政権の終盤に作られたＰＳＲと称する研究会の記録である。1970 年に開催された万博が成功裏に終了した後、71 年 7 月、8 月に米中接近と金・ドル交換停止というニクソンショックが佐藤政権を襲った。日本経済が安定成長の入り口に立ち、国際政治が多極化へと向かう中、新しい針路が模索されていた。そんな時に志垣が白羽の矢を立てたのが、山崎正和、香山健一、高坂正堯、黒川紀章、佐藤誠三郎、公文俊平、志水速雄らの若手学者だった。山崎は晩年の著書『舞台をまわす、舞台がまわる――山崎正和オーラルヒストリー』（中央公論新社、2017）の中で「呼びかけ人は香山健一さんです。（略）いまは内調といっても誰もびっくりしませんし、当時も別にびっくりするようなことをしていたわけではありません。けれど、聞こえははなはだ悪かった。」とＰＳＲについて初めて明かした。

本資料には、「『日本の顔』――ナショナルイメージの形成」や「『戦後民主主義』の再検討」などを論じ合った 1971 年 12 月の初会合以降の記録が収められている（資料番号 0075～）。60 年代の安保問題へと後景に退き、志垣は「これらの優秀な人々がいれば、日本の将来は大丈夫だ」と、心密かに引退を決意したのである。

委託研究を通した内閣調査室の働きは、政策との関連性を見るだけでは分からない。委託研究は、首相らの関心事を論じるというより内調が率先してテーマを選び、ふさわしい現実主義者を集める水面下の作業である。当時、内調室長は週 1 回官房長官と面会し、報告することになっていた。「内調の報告はタイミングが悪い」と叱責されることもあれば、内調が見いだし、場を与えた学者が別の政治の舞台で大きく活躍することもあった。ＰＳＲの面々が、大平政権や中曽根政権の政策研究会で中核的な役割を果たしたのはその一例である。

「志垣民郎旧蔵　内調資料」の重要性は、内部文書だけでなく、志垣が書き続けた日記にある。日々の業務を途切れなく追体験できる詳細な記録で、世間を騒がすような内調絡みの事件を「点」で捉えるしかなかった活動を、「線」として追えるようになった。もちろん、幹部職員だったとはいえ、志垣の記録は内調全体の活動からいえば一部に過ぎないだろう。だがその生き生きとした記述からは、戦前の内閣情報機構とも強い人的つながりがあったことや、「他官庁でやっていない仕事」を指向し重要政策に関与しようとした様子が浮かび上がる。戦後情報機関の研究は、本資料から始めなければならない。